



荊防敗毒散 (けいぼうはいどくさん)

【処方コンセプト】 おできの漢方ー赤くはれて、化膿して、痛むものに。

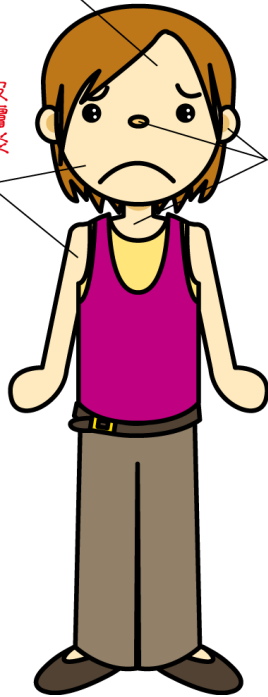
このタイプの方は、化膿性の腫れものが全身にできやすく、それが赤く大きくて時に痛むこともある。解表薬(体表の病邪を追い払う生薬)が主薬になっていることから、かぜの初期でノド・気管支に炎症が出てきたものにも応用できる。

◆荊防敗毒散の処方名には「荊芥・防風を主薬とした、化膿などの毒を敗退（しりぞく）させる散剤」という意味があり、瘡癰（ソウヨウ）（古くから一般に「おでき」といわれているもので、さまざまな化膿性の腫れものをさす）を治療する代表的な処方である。

◆2つの辛温解表薬が主薬になっていることから、病邪が表証にとどまっている皮膚炎（主に初期の化膿性疾患）に用いる処方と考えられる。

頭痛、悪寒、発熱

皮膚炎
(発赤・腫脹・化膿・疼痛)



耳・ノド・鼻の炎症

◆荊防敗毒散をもとに、華岡青洲が「十味敗毒湯」を創方したことは有名な話である。

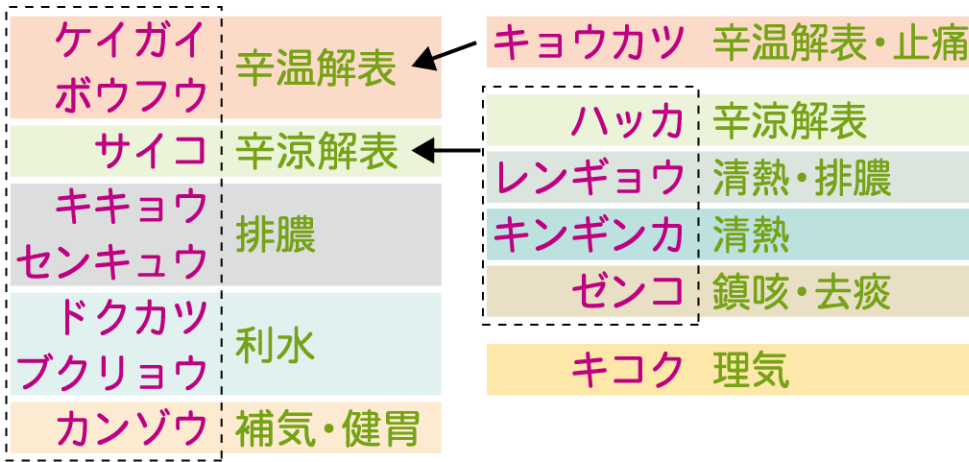
◆十味敗毒湯と同様な使い方をするが、解表薬や清熱薬がより多く配合されており、化膿や炎症が強いものを用いることが特徴である。

◆解表薬が多く、鎮咳薬・去痰薬などが含まれていることから、初期の感冒などにも応用されている。

【処方構成】 14味

十味敗毒湯から桜皮(オウヒ：主に排膿作用)と生姜(ショウキョウ)を除き、羌活(キョウカツ：辛温解表・止痛)、薄荷(ハッカ：辛涼解表)連翹(レンギョウ：清熱・排膿)、金銀花(キンギンカ：清熱)、枳殻(キコク：理気)、前胡(ゼンコ：鎮咳・去痰)を加えた処方構成になる。解表薬や清熱薬、排膿薬が強化されている。

十味敗毒湯
(去オウヒ・シヨウキョウ)



	解表					清熱					利水	補気	駆瘀血	理気	配合生薬数					
	防風	荊芥	羌活	生姜	柴胡	薄荷	黄芩	山梔子	金銀花	連翹						前胡	茯苓	独活	大棗	甘草
荊防敗毒散	○	○	○		○	○			○	○	○	○	○		○		○	○	○	14
十味敗毒湯	○	○		○	○							○	○		○		○	○		10
						桜皮														
荊芥連翹湯	○	○			○	○	○	○	○							○	○	○	○	17
	白芷					黄連,黄芩								当帰,	枳実					
排膿散及湯				○										○	○	○				6
						桔梗											枳実			
葛根湯				○										○	○	○				7
	麻黄,桂皮,葛根																			

処方名	類方鑑別
荊防敗毒散	十味敗毒湯の原方で、おできのファーストチョイス。
十味敗毒湯	化膿の初期あるいはまだ化膿していない皮膚炎に適している。化膿の程度は軽く、痛みも弱い。
荊芥連翹湯	皮膚の栄養状態が悪くて乾燥している状態。熱がでるとカユミが強くなり炎症を繰り返す。体質改善向き。
排膿散及湯	化膿性の皮膚炎の代表処方。化膿は軽症のものが多く、解表薬がほとんどないので、発疹やカユミには弱い。
葛根湯	かぜの初期に用いる。発熱・悪寒の全身症状にはよいが、ノドや気管支の炎症には弱い。